同居家族による否定と過保護な関わり

高齢者用エイジズム尺度作成の試み

○木村美緒¹・山崎幸子²

(¹ 文京学院大学大学院人間学研究科・² 文京学院大学人間学部)

キーワード：エイジズム，高齢者，同居家族

Negative or Patronizing Behavior to Elders: A new scale of ageism.

Mio KIMURA¹, Sachiko YAMAZAKI²

(¹ Graduate School of Human Studies, Bunkyo Gakuin Univ., ² Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin Univ.)

Key Words: Ageism, elders, family

【目 的】

エイジズムとは“高齢であることを理由とした、人々に対しての系統的なステレオタイプ化と差別の過程”と定義されている (Butler, 1995)。従来ステレオタイプやエイジズムは、高齢者に対する否定的な態度や差別の指標として、自己評価や心身の機能への影響が分析されてきた。しかし近年では、高齢者とのコミュニケーションにおけるステレオタイプに基づく過剰な調節がパトロナイジングコミュニケーションと呼ばれ、問題視されている (Ryan, Bourhis, & Knops, 1991)。具体的には、高齢者の能力を低く見積もるなどの結果行われる過度に保護的な関わりが、高齢者の心身に悪影響を及ぼすとされる。他にも、高齢者の精神健康における家族の会話 (岡本, 2000) やソーシャルサポート (島田・山崎・中野・斉藤・渡辺・安村, 2012) の影響が指摘されていることから、身近な家族から高齢者への関わりについて、過度な否定や保護という面を取り上げての検討が有用と考えられる。しかし現在までの日本におけるエイジズム尺度などの中には、前述した過保護な関わりをも含めて高齢者側から測定可能な尺度が存在しない。そこで本研究ではまず、高齢者が最も接する機会の多い家族とのコミュニケーションに焦点を当て、否定的関わりと過保護な関わりという2因子構造を持つ新たな尺度の開発を目指す。その予備的研究として、ここでは項目の収集と選定を目的とし、信頼性、および既存尺度との関連を検討する。

【方 法】

対象者 都内に住む60歳以上の男女86名 (男21名, 女64名・未回答1名)。対象者の平均年齢は、72.03歳 (SD 7.03)。

調査時期 2014年1月から2月

調査手続き 無記名の質問紙調査を行った。なお、質問紙には倫理的配慮に基づく依頼文を掲載した上で、回答によってその同意とみなした。

調査内容 (1) 高齢者用エイジズム尺度 (以下エイジズム尺度) 予備項目として、Cherry & Palmore (2008)、小林 (1991) などの先行研究を参考に24項目を用意し、“家族の中で自分が最もよく接する人物”について“1. よくある～4. 全くない”までの4件法で尋ねた。(2) ソーシャルサポート尺度 野口 (1991) の高齢者用ソーシャルサポート尺度の12項目について、(1)で答えたものと同じ人物について2件法で尋ねた。

【結 果】

尺度の構成 エイジズム尺度について、反応偏向項目を削除した後、主因子法による探索的因子分析を行った。その結果、スクリープロットから、2因子を抽出した。次に、プロマックス回転を実施し、因子負荷量が.30未満であった項目を除外し、構成概念妥当性を考慮して5項目の計10項目が選定された (Table1)。第1因子は、高齢者に対する否定や拒否とい

ったネガティブな関わりを示す項目に負荷が高いことから“否定”因子と命名した。第2因子は、高齢者に対する過剰な保護的関わりを示す項目に負荷が高いことから“過保護”因子と命名した。

尺度の信頼性 尺度全体の α 係数は.70であり、下位因子の α 係数は否定因子が.70、過保護因子が.62であった。過保護因子については信頼性係数がやや低い値となったが、.60を上回る信頼性係数から使用に耐え得ると判断した。

ソーシャルサポートとの関連 尺度の下位因子得点とポジティブサポート (以下PS)、ネガティブサポート (以下NS) との相関係数をTable2に示す。

Table1 エイジズム尺度 因子分析の結果

項目	否定	過保護
因子1 ($\alpha=.70$)		
8 避けられたり、真剣にとりあってくれない。	.67	.19
9 私の話題につき合いで話しているのだと思うことがある。	.66	.06
3 「もの忘れ」を指摘される。	.61	.07
4 少し元気がない、体調が悪いときでも「年のせいだ」といわれる。	.57	.10
12 やりたいことに「年だから」と反対される。	.39	.21
因子2 ($\alpha=.62$)		
20 やさしい、わかりやすい言葉で話される。	-.02	.75
16 大きくゆっくりな声で話される。	-.03	.59
24 過保護にされている。	.03	.49
17 何かと頼らせようとしてくる。	.13	.34
18 今まで私がやっていたことを自らやってくれ (車の運転、家事など)。	-.07	.32

Table2 ソーシャルサポート尺度との相関

	ネガティブサポート	ポジティブサポート
否定	0.39**	0.18
過保護	0.13	0.26*

**p<.001 *p<.05

【考 察】

24の予備項目に対する因子分析の結果、2因子構造を持つ10項目が精選された。エイジズムが孕む危険性の1つは、否定的なエイジズムは差別として認識されやすいが、保護や優遇という肯定的エイジズムは差別と認識されにくいことである (Palmore, 1999)。このことから、同じ高齢者への関わりでも、否定因子は主観的に判断し得るネガティブな関わりとしてNSと相関し、一見悪意のない関わりでもある過保護因子はPSと相関すると考えられる。従って今回、上記それぞれが正の相関を示したことから、因子の妥当性が一定程度確認された。今回の調査は都市部の60歳以上というサンプリングの偏りがあり、身体的に元気な前期高齢者も多かった。今後の調査によって、後期高齢者を含めた多くの対象者によって尺度の妥当性・信頼性を検討することが課題である。